



企画展

収蔵資料展

～近年の収蔵資料を中心に～

[会 場] 羽生市立郷土資料館展示室
 [期 間] 令和5年7月15日(土)～
 9月24日(日)
 [時 間] 午前9時～午後4時30分
 [休館日] 毎週火曜日

2年振りの開催となる企画展は主に平成28年から令和3年の間に新たに収蔵した資料について、ご紹介します。江戸時代の新郷川俣関所に関する古文書や昭和のブラウン管テレビや電気掃除機、古写真、昔の教科書など様々な種類の資料があります。是非ご覧ください。



テレビ受像機
(昭和38年)

寺院所蔵資料調査

市内の寺院で所蔵されている仏像・仏画などを専門家のご指導のもと、調査を実施しています。今年度は下村君地区の永明寺様で実施しています。今後、調査結果をまとめて、報告書として刊行予定です。



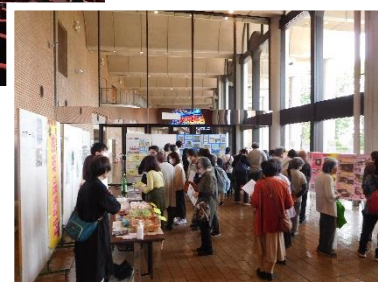
調査の様子

ふるさと講座

令和5年5月13日(土)に東京都立大学牧野標本館の村上哲明教授を講師に招いて、産業文化ホールにて開催しました。市内に国指定天然記念物の自生地がある食虫植物のムジナモを国内で初めて発見した植物学者の牧野富太郎博士の業績と博士が収集・作成した植物標本について、ご解説いただきました。市内外から277名もの方にご参加いただきました。



講演の様子



協力団体ブースの様子

見学・出張講座

出張講座 令和5年7月21日(金) 埼玉純真短期大学/学生10名、「ふるさと講座」にて、郷土資料館の紹介をしました。

施設見学・出張講座随時受付中!

令和4年度の新規収蔵品

大八車/木工道具/三村秀竹作品/農具/地図/写真/絵葉書などを購入、ご寄贈により新たに収蔵いたしました。将来世代まで残せるよう大切に保管し、今後展示等の形でご紹介したいと思います。

収蔵庫だより

郷土資料館の収蔵庫の中には、民具や古文書、考古資料など様々な種類の貴重な資料が保管されています。本コーナーでは、その収蔵庫に納められた資料からピックアップして、紹介します。

初回となる今回は、「文字の書かれた徳利」についてご紹介します。

この徳利は、酒や醤油など液体の商品を詰めてお客へ貸与され、空になったら店舗に戻され、また再利用されるリターナブルボトルとして使われていたため「通い徳利」と呼ばれました。表面には、店舗の名前や店印（屋号）、電話番号、所在地などが筆書きされています。

この「通い徳利」の仕組みは、文献史料や出土遺物から江戸時代にはすでにあったことが知られています。ただし、この頃は筆書きによる文字は施されず、釘などの鋭利なもので店印などが刻まれました。筆書きが施されるようになるのは、明治時代になってからのことです。第二次世界大戦後にガラス瓶が普及すると、「通い徳利」の利用はなくなりました。

当館では、この「通い徳利」を令和5年7月現在で9点所蔵しています。

写真の資料は、平成23年（2011）頃まで、現在の羽生市中央三丁目1番地内に所在した「住吉屋酒店」の「通い徳利」です。表面には「住吉屋」／店印「ヤマにキ」の筆文字が記されています。大きさは五合（約900ml）、一升（約1800ml）、大瓶（容量不明）の3種です。

住吉屋酒店は、昭和36年版の「羽生市商工名鑑」によると、創業が天保年間で、昭和初期まで醸造業を営み、以後は小売を商っていました。本資料が使用された年代については、伝わっていません。しかし、電話帳の記録から住吉屋酒店は遅くとも大正10年には電話加入していたこ

とがわかります。電話を店舗に導入していたのであれば、徳利に電話番号が記されていてもおかしくありませんが、本資料にはありません。このことから想像すると、本資料の徳利がつくられた時期は住吉屋が電話加入する前、つまり大正初期以前の可能性が考えられます。ただし、電話加入していたとしても、必ずしも徳利に記したとは限りません。大正末期から昭和初期につくられたことが明確な住吉屋の「通い徳利」が発見されれば、本資料の年代も明らかになるかもしれません。皆様のご自宅に、住吉屋の徳利があれば、資料館までご一報ください。

今回は住吉屋の徳利をご紹介しましたが、このほかに羽生町の「十一屋」、上羽生の「北越屋」、上新郷の「南陽醸造」などの「通い徳利」を収蔵しています。これらについては、別の機会にご紹介したいと思います。

使用していた方がお亡くなりになり、詳細が分からなくなった資料も、わずかな情報から、その背景を探ることができます。古くなって使わなくなった道具でも、もしかしたら羽生の歴史を語ってくれているかもしれません。そのようなものがあれば、郷土資料館にご相談ください。



住吉屋の「通い徳利」